

自然科学研究機構 国立天文台
土居 守 台長 様

TMT (Thirty Meter Telescope)は口径 30 メートルの超大型光学赤外線望遠鏡で、従来の大型望遠鏡を凌駕する解像度・感度を実現し、2030年代以降の天文学の前進に不可欠な最先端の観測施設です。その研究の対象は、光赤外天文学分野にとどまらず、広範な天文学、物理学や惑星科学、宇宙生物学など様々な科学分野に及び、数多くの画期的な新たな知の創出が期待されています。国立天文台はこのTMT計画を最重要計画と位置づけ、日本の研究者コミュニティと強く連携して計画を推進してきたと理解しています。

文部科学省「学術研究の大型プロジェクトの推進に関する基本構想『ロードマップ2023』」の策定に際して、日本天文学会はTMT計画が自然科学に大きな前進をもたらすだけでなく、我が国の研究力の強化や国際的なプレゼンスの向上、世界に通じる人材育成にも資すると考え、サポートレターを発出しました。TMT計画は、その重要性や実現可能性、現状が考慮された結果、ロードマップ2023に掲載されています。

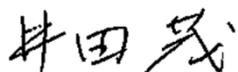
米国においては、TMT計画は巨大マゼラン望遠鏡 (GMT : Giant Magellan Telescope) と合わせた米国超大型望遠鏡 (US-ELT) プログラムとして推進されてきました。しかしながら、5月30日 (米国現地時間)、米国国立科学財団(NSF)から2026年度予算要求書が米国連邦議会に提出され、その中で、GMTを最終設計段階に進める一方で、TMTは同段階に進めず、追加資金提供を約束しないという方針が示されました。

TMT計画は、参加メンバーである米国、カナダ、インド、日本の最先端の高度な技術力を持ち寄って、極めて難しい高解像度・高感度を実現するものです。既に技術的困難を克服し、また課題であった建設地ハワイでの地元住民の理解も着実に深まっている現在の状況において、計画が頓挫するようなことがあってはならないと考えます。

NSFの発表は予算要求の内容であり、予算の歳出権限を持つ米国連邦議会が今後示す方向性が計画実現の鍵を握ると認識します。TMT計画を前に進めるためには、日本が率先してTMTの実現に決意をもって取り組んでいることを示すことが重要であると考えます。

したがって、日本天文学会は、引き続き日本国の「学術研究の大型プロジェクト」の一つとして国立天文台が中心となってTMT計画を推進することを強く支持します。

令和7年6月3日
日本天文学会会長



東京科学大学地球生命研究所(ELSI) 教授
Email: ida@elsi.jp Tel:+81-3-5734-2620